

戦国末期の福島城代 本庄繁長の生涯

①

本庄繁長公没400年祭 堀田 亨 (文・図解)
実行委員会事務局長

庄内で本庄繁長に敗れた最上軍の将最上義光は、私戦禁止令に反するとし、豊臣秀吉に訴えた。審議の末、両成敗となり、庄内地方十五万石は上杉側の武藤氏らの手に戻ったが、一手に責任を負った繁長は先祖伝来の地(現新潟県村上市)を追われ、大和(現奈良県)西の京へ蟄居(ちつきよ)させられた。

蟄居中、徳川家康、豊臣秀次、前田利家から召し抱えの誘いがあつたが、繁長はすべて断つたと言われている。その後、繁長は秀吉に願ひ出て朝鮮に出兵し、釜山の上杉景勝軍に参陣し復帰を果した。そして、上杉家の会津若松への国替えに従い、守山城代(現郡山市)を経て、福島城代に就任する。

慶長五(一六〇〇)年七月、家康は敵対する上杉氏に向け江戸から進軍したが、石田三成の挙兵により引き返してしまふ。

直江兼統らは追撃を主張したが、景勝が仕儀に反するとして拒み、会津若松へ撤退した。そして、関ヶ原の合戦後、家康側の伊達政宗(三十四歳)の軍勢二万が、繁長(六十一歳)の軍勢三千五百の守る福島城へ侵攻したので。

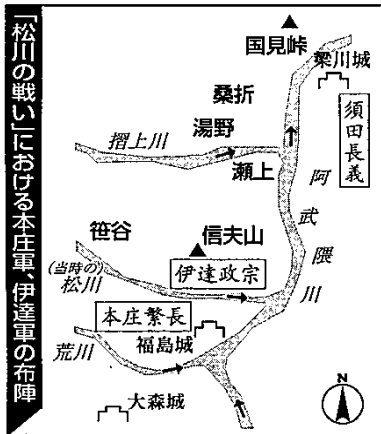
繁長は伊達勢が松川を渡るのを待って迎え撃つ作戦であったが、血気にはやる次男義勝隊や岡左内隊は進軍を阻もうと松川を渡り、鉄砲を打ちかけた。左内が伊達軍本陣に攻め入り、政宗に太刀をあげせ、兜(かぶと)の前立てを折つたとの記述もある。しかし、大軍に追いつけられた義勝は反撃を繰り返しながらも多くの武将を失い、福島城内に辛うじて逃げ込んだ。

伊達軍の隊列は、後方は摺上川、前方は松川というほどの大軍だった。政宗は信夫山のふも

新田開発 積極的に



本庄繁長の墓所である長楽寺(福島市舟場町)



「松川の戦い」における本庄軍、伊達軍の布陣

との黒沼神社に本陣を移し、福島城に迫った。義勝の奮闘により、結果的に伊達の大军を狭い福島城下に誘い込んだことが功を奏した。繁長は小技が効くように槍(やり)を短く切り詰めさせ、待ち受けた。そこへ、梁川城からの須田長義(二十一歳)の援軍二千が伊達軍の背後を突いたため、城内からも三千の兵

がくりだし、たまたま政宗は敗走した。

14日、記念講演会

その後、関ヶ原での覇者徳川家康に対しては、徹底抗戦派(兼統ら)の進言もあったが、景勝は繁長らの意見を取り入れ、和議の第一使者として繁長を上洛(じょうらく)させた。その成果もあり、上杉氏は取りつづしを免れる。繁長の松川での武勇が交渉を有利にさせたと考えられる。そして、減封となった上杉氏を支えるため、繁長も信達地方(福島盆地)で新田開発や灌漑(かんがい)用水の整備を積極的に行った。この頃、日本三大銀山の一つ半田銀山(桑折町)の開発が始まったと言われている。

員・前村上市郷土資料館館長

そして今、繁長の墓所を前にして、いく度かの大火や大震災を乗り越え、村上ゆかりの武将の墓を、大切に守り継いでくれている長楽寺のご住職、檀家(だんか)の皆さまには本当に頭が下がる想いである。繁長の魂もその一部始終を天から見守っていることだろう。

「愚直の将・巻一・四」(大場喜代司著・生活文化叢書刊行会)、研修テキスト「戦国の世を駆けぬけた關将・本庄繁長」(松山勝彦著)、「武士たちの黄昏」(渡辺れい著・新潟日報事業社)、「阿賀の風雲 内乱篇」(大嶋満夫著・村上新聞社)、小説「奇策」(風野真知雄著・祥伝社文庫)

文 化